

厚生労働科学研究費補助金
新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業
子宮頸がんワクチン接種後に生じた症状に関する治療法の確立と情報提供についての研究
平成 30 年度 分担研究報告書

東北大学病院神経内科における診療実態

研究分担者 青木 正志 東北大学大学院医学系研究科神経内科 教授

研究要旨

【目的】平成 30 年度における東北大学病院神経内科における子宮頸がんワクチン接種後の神経障害が疑われた患者の診療実績を調査する。またその病態を検索する。

【方法】上期間内に当科へ紹介となった子宮頸がんワクチン接種後の神経障害が疑いの新規患者は 0 名であった。

【結果】平成 27 年度は 4 名の症例が外来受診された。平成 28 年度も 4 名が外来を受診されたが、平成 29 年度は 1 名、平成 30 年度は 0 名であった。いずれも神経学的所見では明らかな異常は指摘できない。当院を受診する子宮頸がんワクチン接種後の神経障害疑いの患者は減少している

【結語】継続して注意深い診療をしていく必要がある。

A. 研究目的

平成 27 年 4 月から「子宮頸がんワクチン接種後の神経障害に関する治療法の確立と情報提供についての研究班」(池田班)に参加をして、当院婦人科と共にヒトパピローマウイルス感染症の予防接種後に生じた症状の診療に係る協力医療機関となった。平成 28 年度以降の東北大学病院神経内科における子宮頸がんワクチン接種後の神経障害が疑われた患者の診療実績を調査する。また本病態の成因を検索する。

B. 研究方法

平成 27 年度は 4 名の症例が外来受診された。その後の当科へ紹介となった子宮頸がんワクチン接種後の神経障害の疑いの患者について調査した。

(倫理面への配慮)

患者個人情報取り扱いに関しては匿名化を行っている。

C. 研究結果

平成 28 年度は新規受診患者 4 名が外来を受診されたが、平成 29 年度は 1 名であり、平成 30 年度は 0 名であった。いずれも神経学的所見では明らかな異常は指摘できない。再来患者は 1 名であり、採血や脳脊髄液検査の希望はなかった。子宮頸がんワクチン接種後の神経障害疑いの患者は減少している。

D. 考察

患者血清中の脳炎関連自己抗体を検出するための ELISA を用いたシステムを構築、維持しているが、採血や脳脊髄液検査の希望なし。

E. 結論

継続して注意深い診療をしていく必要がある。

F. 研究発表 (本研究課題に関連したもの)

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

G. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

なし